

国語科の主張

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木下, 聡美, 小野, 祐一郎, 繁田, 美帆 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028063

国語科の主張

木下聡美 小野祐一郎 繁田美帆

1 教科で育みたい人間像

私たちは、国語という教科で他者とのコミュニケーションを繰り返す中で「言語感覚を磨き、自らの思いを表現していく人」を育みたいと考えている。

人間が円滑にコミュニケーションを行うためには、言葉を表面的に理解するのではなく、背後にある相手の思いを推測して自らの考えと比較したり、状況に合わせて言葉を吟味して使ったりすることが必要である。そうしたコミュニケーションの中で、言葉を的確に理解したり、自分の思いを正確に表現したりすることができるようになり、言語感覚が磨かれていく。

このようなことができるようになると、人間は想像力を働かせて物事を別の視点から考えたり、多面的に捉えたりすることができるようになる。すると他者や目の前の事実への理解が深まり、本質に迫る議論を行ったり、核心を突くような発言によって相手の心を揺さぶったりすることができるようになっていく。さらには新たな価値を創造したり、自己を省みたりすることにもつながっていき、人生をより豊かなものへと変容させていくことができるようになると考えられる。言語感覚もまた、このような中でいっそう磨かれていくものと考えられる。

以上のことから、私たちは、子どもたちが他者とのコミュニケーションを繰り返す中で「言語感覚を磨き、自らの思いを表現していく人」に成長してほしいと願っている。

2 教科ならではの文化

私たちは文章を読んで感動したり、誰かの話に涙したりすることがある。それは、心揺さぶられた経験や思いを他者と共有したいという願いが込められた言葉が、聞き手の心に実感をもって響いてくるからである。また、試行錯誤を繰り返して生み出された文章の構成や、精選された言葉に込められた語り手の思いが、時代を越えてもなお共感されたり、問題提起したりすることもあるだろう。

普段行われる何気ない会話はもちろんのこと、歌、演劇、テレビ、インターネット、本、新聞など、私たちが生きる世界は言葉があふれている。それらの言葉をどのように感じとるかは、その人が生きてきた中で培ってきた言語感覚やさまざまな経験が大きな影響を与えているものと考えられる。私たちは自分の思いや考えがより正しく他者に伝わるように言葉を吟味したり、他者の言葉を適切に受けとることができるように言葉の意味を考えたり、多くの情報を様々な視点から捉え直したりすることがある。さらには、作品（言葉）にふれて抱いた思いを他者と伝え合うことで、自分の考えを深め、価値観を広げていくこともある。私たちは作品（言葉）の世界に浸る営みを繰り返すことで言語感覚を磨き、創造力を育んだり、感受性を豊かにしたりしているのではないだろうか。

このような点から「創造力や感受性を働かせて作品（言葉）の世界に浸る営み、言葉を吟味しながら自分の思いを発信していく営み、自分自身を見つめ直していく営み」を「国語科ならではの文化」と定義した。

3 授業づくりで大切にしていること

私たち国語科が願う子どもの学びは、描かれているものの価値や、人々の生き方、考え方に対して自分なりの考えをもったり、それを他者と交流したりすることで、言語感覚を磨き、自らの考えを深めていくことができるようになることである。例えば小説を読む際には、情景描写や人物描写、象徴表現や伏線、語り手の視点や関連付け、比喩、対比、段落構成といった技法を活用して読み、それらを結びつけることによって作品全体としての意味を捉えていくだろう。また、自分の考えを発信するときにそれらの表現技法を活用し、相手意識をもって伝わる言葉を吟味していくことも必要である。

こうした学びを展開していくために、私たちは、「題材化」を大切に実践を行ってきた。題材化とは、授業者が作品や教材（物語、説明文、短歌等の詩歌、新聞記事やパネルディスカッション等の言葉を用いて表現されたもの）と子どもたちをつなぎ、教科ならではの文化を味わうことができるような授業を構想することである。子どもたちは魅力的な題材に出会い、本質にせまっていく問いを共有することで、繰り返し叙述に戻って自分の考えの根拠を探したり、仲間の発言に耳を傾けたりしながら主体的に取り組んでいく。すると、問いを追求していく過程では、仲間の考えを引き出したり、自分の考えを広げたりしていくような対話が生まれる。これらのことを繰り返す中で、子どもたちは言語に対する感性や表現力を磨き、

題材に対する捉えや，自分の中にある価値観さえも変化させていくのである。

また，新たな題材に取り組む過程において，それ以前に学んだことや身につけたことを活用する場面もあるだろう。このような時に，子どもたちは自らの学びを自覚していくものと考えられる。私たち国語科は，子どもたちがこのようにして言語感覚を磨き，自らの思いを表現できるようになっていくことを願い，授業を構想している。

授業実践

1 題材名 人生を選択するということ—安部公房『鞆』—

2 題材の目標

複数の作品を読み、自分らしさとは何かということや、何を人生の幸せととらえるのかということを考えてきた子どもたちが、人物描写の変化や行動描写、比喩、象徴表現などから、鞆によって道が制限されることに対する青年と「私」のとらえ方を読みとることを通して、人生を選択することや「自由」に対する考えを深め、自分の生き方に思いを巡らせることができる。

3 題材観

(1) 人生を選択するということ

私たちはその時の自分の状況に合わせて、「よい」と思うものを選択して生活している。時にそれは無意識のうちに行われていることもある。その小さな選択の繰り返しは、「人生」という大きなくくりで考えたとき、一人一人の生き方そのものを左右していくものとなっているはずである。

安部公房の「鞆」においても、「私」と青年は「鞆を持つこと」「鞆を置いていくこと」を自ら選択している。このような選択を「一種の消去法」「選ぶことのできる道が、おのずから制約されてしまう」と言っている。つまり、青年は自分の行動が制限されていると考えているのである。

一方、「私」は青年が置いていった鞆を「なんとすることもなしに」持ち上げて歩き始めた。するとその経験を「嫌になるほど自由だった」という言葉で表し、青年が感じていた制約さえも受け入れて生きることを選択しているように感じられる。

「私」が青年と出会い、鞆を持つことについて語り合う描写は、「自由とは何を意味するのか」ということを問いかけてくる。読み手である私たちは「自分で選ぶことの意味」を考えるきっかけとなるだろう。

(2) 鞆を持つことの意味

青年が持ってきた鞆を見た「私」は次のように述べている。

職探しに持ち歩くにはいささか不似合いな——赤ん坊の死体なら、無理をすれば三つくらいは押し込めそうな——大きすぎる鞆

「赤ん坊の死体」という衝撃的な比喩で鞆の大きさを表現することで、読み手に「鞆の中身は何か」「青年は何者なのか」という疑問を抱かせる。その疑問は、二人の会話を通してさらに深まっていく。なぜ鞆を持って歩くのか、その意味について、青年の立場と「私」の立場で考えていくことで、「鞆」が象徴していることを読みとり、鞆を持

つことを選択した二人の行動が意味することについて、考えを深めていくことができるだろう。

①青年の姿から考える

半年以上前に求人広告を出した「私」の事務所を訪れた青年は、その理由を「鞆のせい」だと言う。持ち歩くには大きすぎるサイズの鞆を持っている青年は、なぜこの鞆を持って職探しをしているのだろう。青年にとっての鞆を持って歩くことの意味を、以下の青年の言葉から考えてみる。

- ・体力とバランスがとれすぎているんです。
- ・ちょっとでも急な坂だとか階段のある道にさしかかると、もう駄目なんです。
- ・選ぶことのできる道が、おのずから制限されてしまうわけですね。
- ・鞆の重さが、ぼくの行き先を決めてしまうのです。

これらの青年の発言から、自分の体力に合わせて鞆が変化してくると想像できる。つまり、バランスがとれているときには、鞆の存在は重荷にはならないのである。しかし、坂や階段など困難な状況にさしかかると、思うようには歩けず、鞆によって自分の行動が制限されるということだ。このように不便なもののように思える鞆だが、青年は「鞆を手放すなんて、そんな、あり得ない仮説を立ててみても始まらないでしょう」と述べており、どんなに不自由でも鞆を手放す選択はできないと言っている。

つまり、鞆を持つということは、自分の判断ではなく、鞆という「自分以外の何か」が進むべき道を決定するということだ。「鞆のことは、誰よりも僕がいちばんよく知っています」と答える青年は、鞆の導きに従うことによって人生を決めていくことに違和感を抱いているようにも見えないのである。事務所に採用が決まった青年は次のように述べている。

- ・下宿が決まったら、下宿に置いていきます。
- ・下宿と勤め先の間なんて、道のうちには入りませんよ。

これらの言葉は、自分の人生の道筋が決まれば、鞆の役目はなくなるということを表しているともいえるだろう。「年寄りじみた笑い」をしていた青年が、やっと「表情にふさわしい爽やかな笑い声」を立てたことも、その先の「道」が見えたことを表している。

青年は人生を選択することの不自由さを感じながらも、その責任を鞆に預けている。そして、それによって決まった道を自分の意志で歩くことを表しているのではないだろうか。これは、私たちの人生に重なる部分もあるのかもしれない。

②「私」の姿から考える

青年が置いていった鞆を引き継いだのが、「私」である。「鞆」が道を決めるものであるとするならば、「私」は何を思って鞆を手にしたのだろうか。以下の描写から考えてみる。

- ・なんということもなしに、鞆を持ち上げてみた。
- ・ためしに、二、三歩歩いてみた。もっと歩けそうだった。
- ・急に腰骨の間に背骨がめり込む音がして、そうなるともう一歩も進めない。
- ・方向転換すると、また歩け始めた。
- ・いくら道順を思い浮かべてみても、ふだんはまるで意識しなかった、坂や石段にさえぎられ、ずたずたに寸断されて使いものにならないのだ。

これらの描写から、「私」は事務所を出て自分の足で歩くことを自ら選択していることがわかる。会社の運営などを手がけてきたであろう「私」は、青年の雇用主として彼を採用することを自ら選択している。しかし、青年が持っていた鞆は、「行く先を決めてしまう」ものであった。その未知なる鞆を「なんということもなしに」持ち上げることは、「鞆」に対する興味本位だったのか、進みたい方向があったのか、明確ではない。しかし、「私」は導いてほしい夢のようなものがあつたわけではないだろう。青年のように就職先を見つけるために歩くのとは意味が違って来るだろう。

だから、一度歩き出すと「普段はまるで意識しなかった坂や石段にさえぎられ」てしまい、もとの事務所に戻ることにはできない。事務所に戻る道、つまり自分が歩んできた人生にはうよ紆余曲折があつたことを暗に示す表現でもある。自分の人生を歩くとき、困難を選択するのではなく、「とにかく歩

ける方向に歩いてみる」というのは、一見逃げているかのようにもみえる。しかし、「鞆」という荷物を理由にすることによって、不自由でありながらも、委ねる安心感をもって歩くことができるのではないだろうか。

これらのことから「鞆」が導く「道」は、ためらうことなく、何処までも歩きつづけるものであり、ゴールを自分で定めることも難しいものなのだろう。これは自己決定ではなく、鞆という「他者」による選択である。自分の思いが叶わないこともある。しかし、「私」は次のように述べている。

- ・ちゃんと鞆が私を導いてくれる。
- ・選ぶ道がなければ、迷うこともない。
- ・私は嫌になるほど自由だった。

この「選ぶ道」とは、自分が望むことを自由に選択することを意味しているだろう。しかし、その「道」がないことで感じる「嫌になるほどの自由」とは何を示すのだろうか。読み手に「自由とは何か」ということを問いかけてくる表現である。

(3)「自由」とは何か

本作品で描かれている「自由」をどのように考えるだろうか。「私」は青年と話していたときにとらえていた「鞆」と、自分が持って歩くことによって感じた「鞆」の印象は大きく違っていたはずである。それが「自由」のとらえ方の変化にもつながっている。「私」は鞆を手放さない青年に対し、次のように述べている。

君だって、もっと自由な立場で職選びができれば、それに越したことはないだろう

これは、鞆を持つことによって「選択する自由」がないと「私」が考えている場面である。「鞆に人生を左右される」というのは、自分の意志を貫くことができず、自由な選択ができないということだ。そのことに違和感をもっていた「私」だが、青年が置いていった鞆を持って歩いたあとには、次のように述べている。

選ぶ道がなければ、迷うこともない。私は嫌になるほど自由だった

これは、青年が「鞆」を手放す選択はできないと言っていたこととつながるだろう。「選ぶ道がない」ということは、自分で選択する自由がないということだ。しかし、その自由を手放すことで責任を負わなくてよい「嫌になるほどの自由」を感じることができるのだ。

雇用主であり、社会人として生きている「私」にとって、責任はついてまわるものである。大人になるということは、自分の選択に責任を負って生きるということでもある。青年を採用することも「私」の自由であったが、彼を雇うということは、一人の人間の人生を決める責任を背負うのだ。つまり、自由と責任は一体となっているということを示しているのだろう。

責任から逃れることによって得られる制限のある自由は、不自由でもあり、自分の心を軽くするものでもあるかもしれない。

このように、青年や「私」の行動が象徴表現を用いて描かれることで、「鞆を持つこと」や「道を選択すること」の意味を考え、「自由」をどのようにとらえるのかということを手づかみに問い直していくことができるだろう。

(4) 題材を重ねることによって見える「選択」

本題材と合わせて、三崎亜記の『私』と村上春樹の『バースデイ・ガール』を読むことで、「人生を選択する」ということが見えてくるのではないかと考えている。

三崎亜記の『私』は、納税の督促状に書かれた名前が自分のものではないと訴えに来た市民とのやりとりが描かれている。市役所の職員である主人公は、確かに名前にも住所にも間違いがないことを確認するが、「私の名前であって、私のものではない」と主張する市民の言葉に戸惑う。しかし、戸籍情報が二重登録され、一方が消去された事実から、「消された方が本当の私です」と訴える市民の気持ちを考えていくことができる。このできごととは「自分が自分であるとはどのようなことか」ということについて、主人公と共に考えるきっかけとなるはずである。

村上春樹の『バースデイ・ガール』では、二十歳の誕生日を迎えた彼女が、アルバイト先のレストランのオーナーから、「一つだけ願いを叶えてあげよう」と言われることから始まる。当時どのようなことを願ったのかということについて、大人になった彼女が言及することはなく、謎のままである。しかし、ヒントのようにちりばめられる彼女の言葉から、「何を人生の幸せととらえるか」ということを私たちは改めて問い直されていく。

二つの作品を合わせて読んだとき、「人は何を選擇して生きていくのか」ということを「自分らしさ」や「幸せとは」という視点から考えることができるだろう。私たちが生きていくとき、多くの人とのかかわりの中で、自分なりの選擇をし、不自由の中でも幸せを見つけたり、自分はこのよう

に生きるのだと強く意識したりする瞬間がある。三つの作品を関連づけながら読むことで、安部公房が描く『鞆』の世界をより濃密に味わうことができるのではないだろうか。

(5) 本題材で味わう国語科ならではの文化

「人物描写や登場人物の言葉、行動描写を関連づけて考えたことを伝え合い、鞆が象徴していることを読みとることを通して、道を選択することや自由の意味について叙述をもとに解釈を深めていくこと」を本題材における国語科ならではの文化とする。象徴表現や人物の考え方の対比、描写の変化、作品の関連づけなど、叙述を根拠に読みとっていくことで、主題にせまる読みをつくることができるだろう。その際には自分の考えを伝え合い、異なる意見に耳を傾けることで、自分の価値観を見つめ直し、考えを深めていくことを期待している。

(6) 願う学びと子どもの姿

本題材を通して、子どもたちは「鞆」が何を象徴しているのかについて思いを巡らすだろう。その中で、象徴表現から連想される多様な読みを味わうことができるはずである。鞆の中身や重さが意味することを想像するとき、そのイメージは読み手によって千差万別である。だからこそ、鞆を置いていった青年の行動の意味を描写の変化からとらえたり、鞆を手にして歩き出した「私」が感じたことを象徴表現と関連づけて読みとったりすることで、「鞆を持って歩くこと」「道が制限されること」や「嫌になるほど自由だと感じること」の意味を深く考えていく子どもたちの姿を期待したい。

さらに、一つの題材だけでとらえるのではなく、子どもたちは事前に読んできた二つの作品の登場人物たちのものの考え方や生き方なども重ねて考えることもあるだろう。自分の人生を選択することや、何を大事に生きていくのか、制限されることと自由のつながりなど、様々な視点から作品の描写を読み味わってほしいと思っている。

『鞆』を読むことを通して、子どもたち一人一人が「自由」の意味や「道を選択する」ことの意義を見いだしていくだろう。さらに、描写を根拠に自分の考えを仲間と語り合うことを通して様々な価値観と出会い、どのように生きていくのかということと向き合いながら、自分の生き方を見つめていくことが本題材における願う学びの姿である。

参考文献：安部公房(1984)『笑う月』 新潮文庫

川田英之(2016)『自己の「物語り」をつむぐ国語授業

—主体的・共同的な言葉の学びをつくる— 東洋館出版社

船所武志・辻野康平(2019)「安部公房『靴』を読む—文学作品の「深い読み」を求めて—」

『教育研究実践論集』7号 四天王寺大学

吉田新一郎(2017)『増補版「読む力」はこうしてつける』 新評論

ルーシー・カルキンス(2010)『リーディング・ワークショップ

—「読む」ことが好きになる教え方・学び方』 新評論社

4 学習指導要領との関連

〔思考力, 判断力, 表現力等〕

C 読むこと

(2) 読むことに関する次の事項を身につけることができるよう指導する。

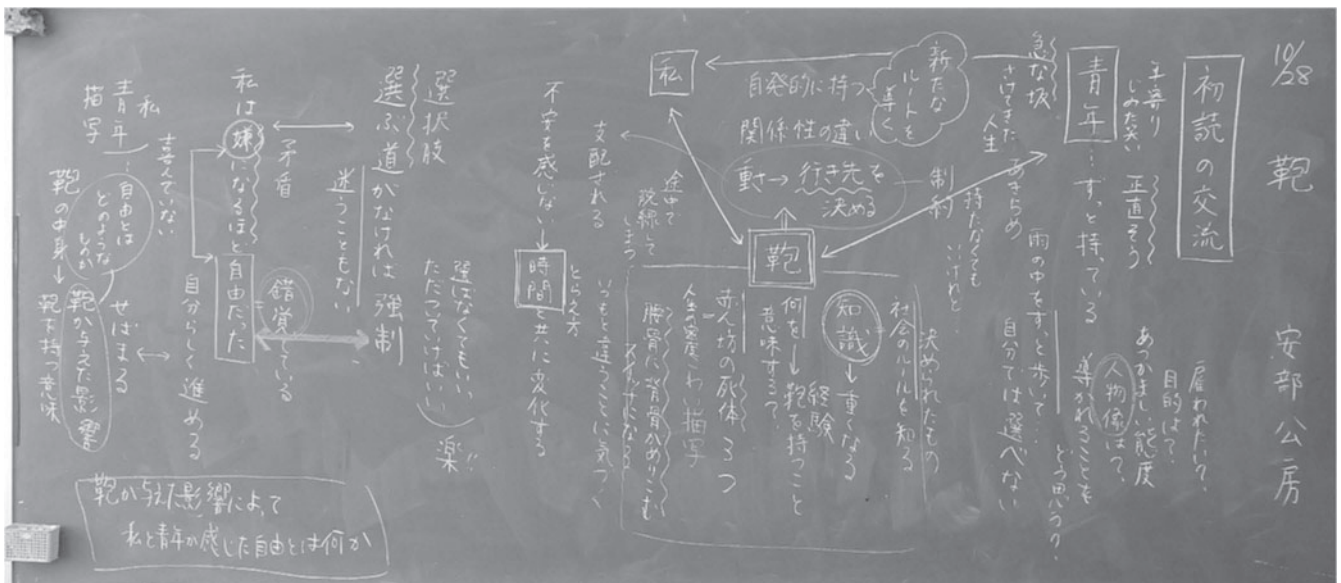
エ 文章を読んで考えを広げたり深めたりして, 人間, 社会, 自然などについて, 自分の意見をもつこと。

5 題材構想 (全9時間)

- (1) 『靴』と出会い, 感想を交流しよう
- (2) 青年と「私」にとっての「自由」とは何か—個人追求しよう—
- (3) 道を選択するうえでの自由とは何だろう
- (4) 三つの作品を比較して考えよう—人生を歩むうえで大事にしたいこととは—

6 本題材でみられた子どもたちのあらわれ

(1) 『靴』と出会い, 感想を交流しよう



<板書1 初読の交流から追求テーマの決定>

三崎亜記『私』, 村上春樹『バースデイ・ガール』を読んできた子どもたちは, 本題材である『靴』と出会った。範読を終えると, 子どもたちから「三つの作品の中で一番納得できる」「なんだか暗い気持ちになる」「ほかの二つの作品より表現がわかりにくい」など, 様々な感想の声が聞かれた。初読後に行った交流では, 以下のような感想や疑問が語られた。

- ・「赤ん坊の死体」と表現されている靴の中身は何を表しているのだろうか。
- ・「靴」は知識や経験が詰められたものを意味しているのだろうか。
- ・知識は社会のルールを知ることなど。それが重荷になっているから, 自分で選択できないのではないか。
- ・青年はなぜ厚かましい態度をとるのか。雇われたくないのか。青年の人物像が気になる。

- ・青年がどんな人で、どんな立場なのか理解できない。鞆には負のイメージがある。鞆を持つことで得られる「自由」はホントの「自由」ではないということが言いたいのか。
- ・「道が制約されてしまう」と「嫌になるほど自由」は矛盾している。時間がたつにつれて鞆に対する心情が変化するのか。
- ・自由には二種類あり、今あなたが感じている自由はどちらの自由で、どちらがよい自由なのかとなげかけていると思う。
- ・鞆によって青年も「私」も支配されているのに、なぜ鞆を手放さないのか。
- ・青年が避けている坂は苦難を表している。道はその人の人生を表しているのだろう。
- ・鞆が導いてくれる安心感。自由になるという錯覚。鞆は今までの自分、つまり人生のキャリアなのではないか。青年と私は似ているから、鞆を手にしたのではないか。
- ・最後の場面で「私」が言っている「嫌になるほど自由」とはどのようなものか。
- ・鞆が意味していることや、二人の関係性をしっかりと考えて、前の二つの作品とも合わせて考えていければいいと思う。
- ・『バースデイ・ガール』に似ている文だと感じた。「鞆」と「バンパー」は同じ役目をしているのではないか。

など

子どもたちは青年や「私」の行動が鞆によって制限されていることから、鞆が意味することに注目していった。また、最後の一文である「嫌になるほど自由だった」という描写をとり上げ、鞆の中身だけでなく鞆を持つことによる自由の意味についても追求したいという思いを高めていった。

その中で、事前に読んだ『バースデイ・ガール』などの作品と比較し、読みとりを深めていきたいという意見がでた際には、「作者が違うから必ずしも一緒とは限らない」「象徴的な意味では共通していることもあると思う」「『バンパーのへこみ』も『私が二重になる』という表現も私たちに考えさせたいことは似ているのではないか」といった考えが交わされた。そこで授業者は、以前に読んだ作品との関連性を考えていくことが、叙述から主題にせまる読みを作りあげていくための一つの視点になり得るということ子どもたちと確認した。

子どもたちの追求していききたい方向が定まってきたところで授業者は「鞆が与えた影響によって、私と青年が感じた自由とは何か」という問いを子どもたちと共有し、次時の個人追求につなげた。

(2) 青年と「私」にとっての「鞆」とは何か

—個人追求しよう—

共有された問いについて考えるため、どのような視点で読み進めていくかを子どもたちと確認した。子どもたちは「鞆」がもつ象徴性や青年と「私」の人物像を考えることで、「自由」のとらえ方や「道」が意味することについても追求できるだろうと見通しをもつことができた。多くの子どもたちが青年の行動や発言の意味に興味をもっていったことや、鞆の中身が何を表すのかということを追いかけていたため、授業者はこれから以下のような視点をもって読み深めていくことを子どもたちと確認し、個人追求に入った。

- ① 青年と「私」の人物像
- ② 描写の工夫 (象徴表現などに注目する)
- ③ 鞆が意味すること (鞆を持つ意味)

- ・青年は自発的に鞆を持っていることから、自分にとって何かよい影響を与えてくれると考えている。だから鞆に頼ってしまっている。
- ・青年は鞆を誰かに押し付けたいのではないか。
- ・鞆が意志を持っているような感じがする。青年が自分の意志で動くときは青年らしさがある。
- ・鞆を持つことで急な坂や階段のある道が選べず、制約されている。鞆が私を導いてくれるという安心感がある。それは自由の錯覚ではないか。
- ・鞆を持っている時の印象が二人でかなり違いがある。「私」が何かにとりつかれたような表現が気になる。
- ・「下宿と勤め先の間なんて道に入らない」とは何かを比喻しているのだろうか。
- ・身の安全の保障が鞆にあることから、責任が鞆に預けられていると考えられる。このように、他者から与えられる自由を積極的自由という。鞆を持つことはホントの自由ではないということが言いたいのではないか。

など

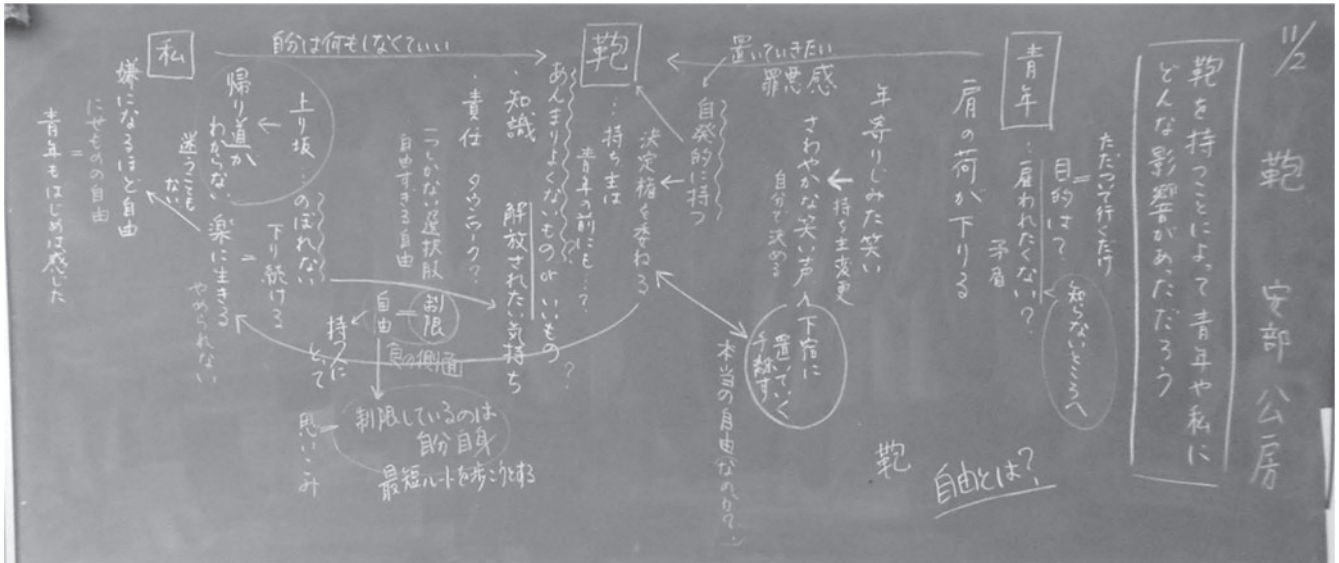
このように個人追求を重ねる中で、子どもたちは描写に立ち返りながら、青年が事務所を訪れた場面の様子や「私」とのやりとりの言葉を分析し、「鞆」が青年や「私」にどのような影響を与えたのかということを読み進めていった。その際に、青年のセリフや行動の矛盾や「私」の描写から「鞆」そのものがもつ象徴性や自由が意味することについて問い直し、叙述に基づいた自分の考えを構築していく姿が見られた。また、追求する過程で、疑問に思ったことを仲間と共有したいという思いをもち、自然に意見交流が生まれていっ

た。子どもたちは異なる意見にも耳を傾けることで、自分の読みの根拠となる描写を読み返していくことができた。授業者は個人の読みが深まって

きたことを確認し、次時から全体で意見交流をすることを伝えた。

(3) 道を選択するうえでの自由とは何だろう

【語り合い① 靴と自由について考える】



＜板書2 語り合い① 「靴を持つことによって、青年や私にどんな影響があったらう」＞

個人追求の時間を通して、子どもたちは自分なりに「靴」と「自由」の関係性を考えてきた。そこで、「個人追求してきたことを全体で共有しよう」と授業者はなげかけ、以下のような語り合いが始まった。

- ・青年が採用されないと感じたとき、「肩の荷を下ろした感じ」と表現されているのが気になった。雇われたくてきたはずなのに、雇われたくないような、気持ちに矛盾がある。なぜ「肩の荷を下ろす」と表現されたのだろうか。
- ・青年は靴に導かれてきただけ。この会社にどうしても就職したかったわけではない。靴を持っているから、自分で考えなくなっているのだろう。
- ・自分で考えなくなるということは、靴はよくないものなのだろうか。でも手放すなんて考えられないと言っているから、持ち主にとってはよいものかもしれない。
- ・靴は自分の決定権を委ねるもの。だから、靴は判断できるような知識や、責任を表しているのではないか。
- ・決定権を委ねて得られる自由は、本当の自由なのだろうか。
- ・靴の持ち主が「私」に変わったときに青年は「年寄りじみた笑い」から「さわやかな笑い声」に変わった。靴を手放すことで本当の自由になれるのではないか。

- ・「年寄りじみた笑い」というのが、靴を持つことの負の側面を表しているのではないか。
- ・その靴を「私」を持った。その時に自分は何もしなくていいという「嫌になるほど自由」を感じている。
- ・青年も「自発的に持っている」「手放すなんてありえない」と言っており、靴に従うことに自由を感じていた。
- ・靴を持つと道が寸断されたり、上り坂が上れなくなったりする。つまり、下り続けるしかない。楽をして生きるということになる。それはなかなかやめられないものなのかもしれない。
- ・制限されていることを自由と感じるのはなぜだろう。
- ・この「自由」は人によって感じ方が違うのではないか。常に最短ルートを歩こうとすることで、同じ道しか歩かなくなることは、自由ではない。靴を持つことで今までの道を消して、新たな道を知ることができる。靴を持つことで自分の制限を解除できるのではないか。
- ・にせものの自由と本物の自由があるとすると、「自由」とは何かがわからなくなってきた。
など

このように、子どもたちは異なる視点の考えに耳を傾けたり、質問し合ったりすることで、「靴に導かれることは自由なのか」という疑問をもちはじめた。「本物の自由」と「にせものの自由」と子

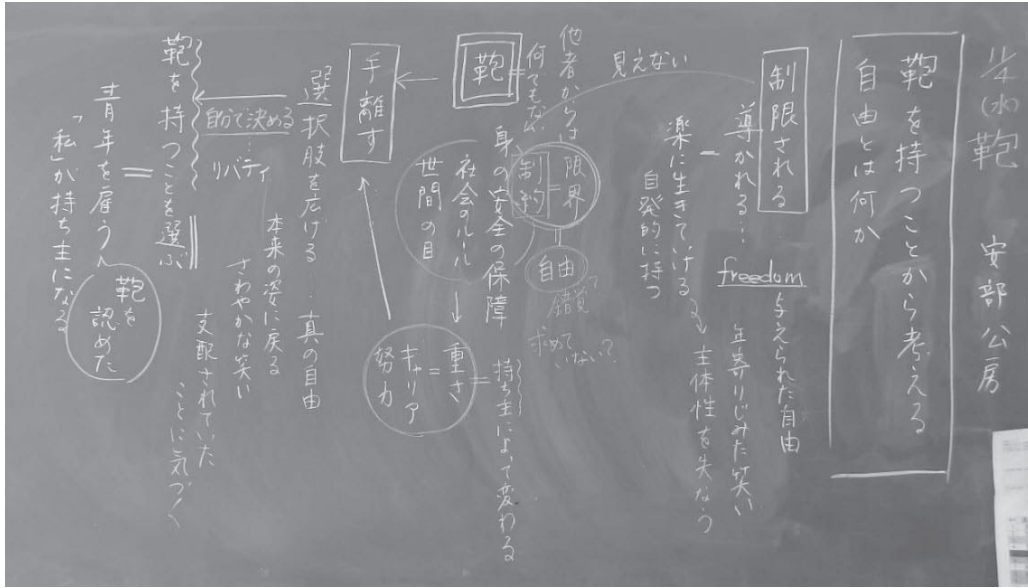
どもたちは発言していたが、青年と「私」が感じている自由には違いがあるのではないかと考えている子どももいた。また、鞆を置いていくことにも意味がある、青年の前にも鞆の持ち主がいたはずだ、といったように「鞆」がもつ象徴性に注目して考えている子どももいた。

さらに、授業終盤の「鞆を持つことで今までの道を消して、新たな道を知ることができる。鞆を持つことで自分の制限を解除できるのではないか」

という発言によって、「鞆を持つことで自由が制限される」と考えていた子どもたちは「自由とは何か」とさらに揺さぶられることになった。

それらの発言をつなげていくことで、この作品の本質にせまっていきたいと考えた授業者は「鞆を持つことと自由のつながりについて考えてみよう」となげかけて、次時につなげた。

【語り合い② 自由とは何か】



<板書3 語り合い② 「鞆を持つことから考える自由とは何か」>

子どもたちは青年のセリフや行動描写と「私」の考え方を関連づけることで、「鞆」を持つことで描かれる「自由」について以下のように語り合っていた。

- 英語で自由には freedom と liberty がある。freedom は与えられた自由で、liberty は勝ち取った自由。この話は freedom だと思う。青年は与えられた範囲内での自由をもっていて、鞆に全部責任を押しつけるだけで、自分で決定していない。何をしても鞆が最終的に背中を押してくれるという信頼があるからその中での自由を「自由だ」と勘違いしていると思う。
- 鞆を持った人は freedom を感じている。鞆は持っている人の身の安全を保障している。その中で持っている人は行動するわけだから、坂を登ったり、階段を上ったりするときに制限されていると感じるのではないか。例えば、親が子どもに「この公園で遊んできな」と言うときも、それには見えない制限がある。本当は公園から出てはいけないとか、危険な遊びをしてはいけないというように、「好きに遊んできていい」

という言葉にも、裏を返せば制限がたくさんある。

- 「鞆」というのは選択しなければいけないという制約から解放されて自由になれるもの。だから、「制約＝自由」という考え方が適していると思う。「制約」というのがさつき公園の例えと同じで、社会のルールとか世間の目だと思う。制約はあって当然のことで、決められたことを疑うことはしない。だから青年は自発的に鞆を持っている。
- 鞆そのものが自由を決めているというより、「鞆の重さ」が決めている。「鞆の重さが行き先を決めている」ことで、急な坂を上れないということが起こる。それは青年の限界そのものを表していると思う。その限界がある自由を「自由」だと錯覚していると思う。
- 鞆を持つことでは努力という制約から解放されているように感じるけれど、「嫌になるほど自由」というのは、当事者は自由と思っているけれど、第三者から見ると自由ではないということが言いたいのではないか。
- 鞆を手放すこと、鞆を持つことは自分で選択し

て獲得したもの。それによって制限されることも自由と言えるのではないか。むしろ、制限のある自由こそ、僕たちが普段感じている「自由」だと思う。

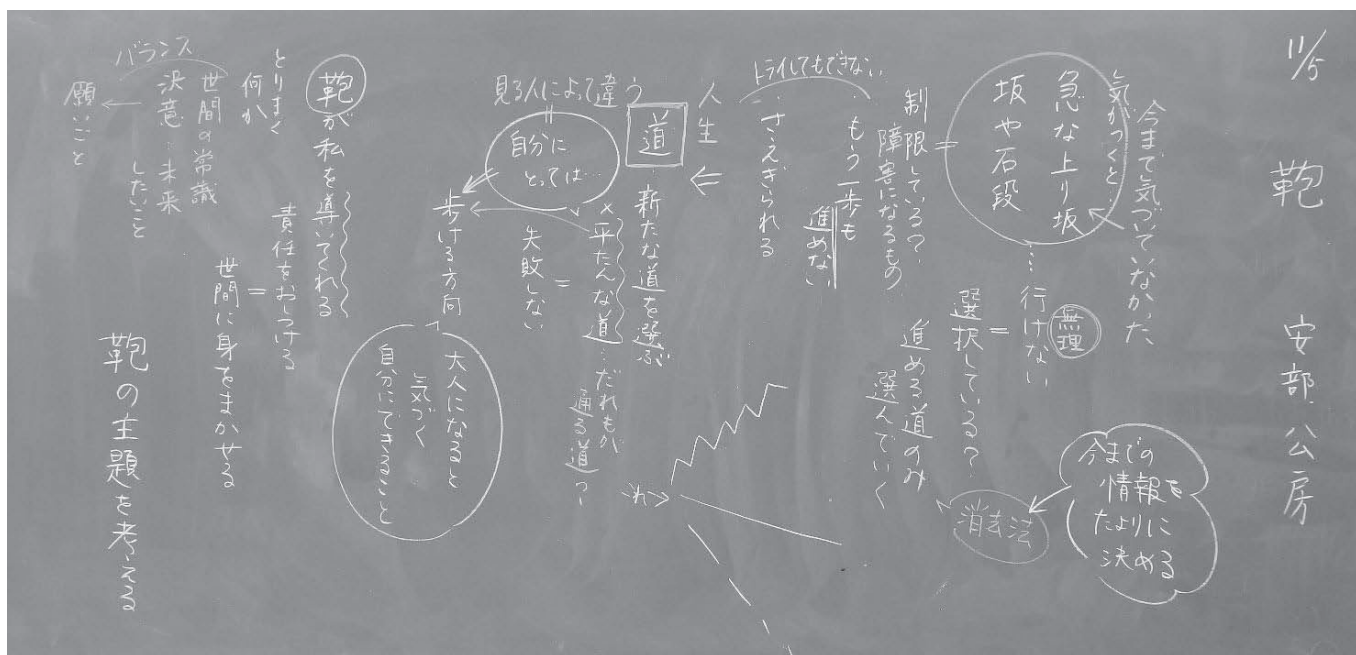
・鞆を手放すことによって気づいた選択肢の広がりを感じているのではないか。

など

「自由」をどのようにとらえるのかを考えるうえで、「選択肢が少ないこと＝制限されていること」ととらえ、「錯覚した自由だ」と否定的に考える子どもと、「制限されている（限界を知っている）からこそ自由だ」と肯定的に考える子どもに分かれた。また、鞆を自ら手放すことは、与えられた自由から、自分で選択する自由へと変化しているという意見もあり、それぞれの自由のあり方考えることで、「自由」に対するとらえが深まっていった。

しかし、子どもたちの「ものの考え方」が先行し、叙述との関連が薄くなってしまっていた部分もある。自分の考えの根拠となる叙述として、青年が「年寄りじみた笑い」から「爽やかな笑顔」になったことや、青年が鞆を手放せないと置いていくと変化したことを挙げている子どもも多かったが、「私」自身が鞆を持ったことでどのように考えているかについての発言が少なかった。そこで、授業者は「当然の成り行きとして後に鞆が残された」「なんということもなしに鞆を持った」という描写を取り上げ、『私』は鞆を持ったことで何を考えているのだろうか」と問い直し、次時の語り合いにつなげた。

【語り合い③ 鞆や道が象徴すること】



<板書4 語り合い③ 前半「道を選択することはどのような意味があるか」>

「私」の視点で描写を読み返していく中で、子どもたちの発言は「道」に焦点化されていった。「私」の視点で読むことで、「自由とは何か」を考えることより「人生」というキーワードで読み深めていく子どもが増えたことも印象的であった。そのことによって、「ずたずたに寸断された道」「坂」「石段」といった描写と人生を関連づけて考え、「人生の選択をするときに何か重荷を背負うと、自分が行きたい道に進めなくなることもある」という発言もあった。

さらに、「坂や石段のある道を選択しないというのは、自分で決めていることだから、むしろ『今

までは気づいていなかった道の様子に気づいた』つまり、『鞆は自由を広げている』と言えるのではないか」という発言から、「鞆」や「道」が象徴していることを自分たちで問い直していった。その際には、根拠となる描写をもとに、より説得力のある読みをつくろうと、叙述に立ち返りながら読んでいく姿が見られた。

<「鞆」の象徴性についての発言>

・「私」は求人広告を出し、社員をもつ。他人の生活にも責任がある立場になっている。その責任が鞆の重さになっている。

- ・「靴」そのものより、靴を持つことによって取り巻く環境に左右されることが『道』を選択することにつながるのではないか。青年が「当然の成り行き」として、靴を置いていったのは、就職が決まり、自分の『道』が決まったから。事務所と下宿が道の間に入らないのは、「決められた道」だからだろう。
- ・「バランスがとれすぎている」というのは、靴にある「願い」や「世間の常識」などと自分の思いのバランスがちょうどいいとき。その時は「重さが気にならない」ので、何かに挑戦しようとしているときにはバランスが崩れて、道が寸断されたり、坂に感じたりするという事なのかもしれない。
- ・青年が持っていた靴を「私」が持つ。その靴は体力とのバランスがとれているときには気にならない。「靴」の存在に気づくタイミングは人それぞれということ。だから誰もが自分なりの「靴」を持って生きているのだろう。
- ・「靴」は目標や夢を表すものかもしれない。目標が決まることで、進む道が見えてくる。複数の道があると迷うけれど、結局自分が選択する道は一つ。自分で道を選ぶことが本当の自由だ。

< 「道」の象徴性についての発言 >

- ・「歩ける方向に進む」と言っていることから、平坦な道に見えるのは、靴を持っている人だけ。もしかしたらその道が坂だと感じる人もいるのではないか。
- ・「道」を考えると結局「靴」を考えなければならなくなる。「道」はその人の人生であるし、道を選択していくことで大人になっていく。大人になって振り返ってみるといくつも選択肢があったことに気づくけれど、その時はその道しか選べないということもあるのではないか。
- ・「靴」を持つことで、自分で道を選択している

ことに気づく。「この道を選んだからには」という思いが生まれて、道を進んでいくことになる。その「道」を自分で選択することが人生だし、生き方だと考えた。

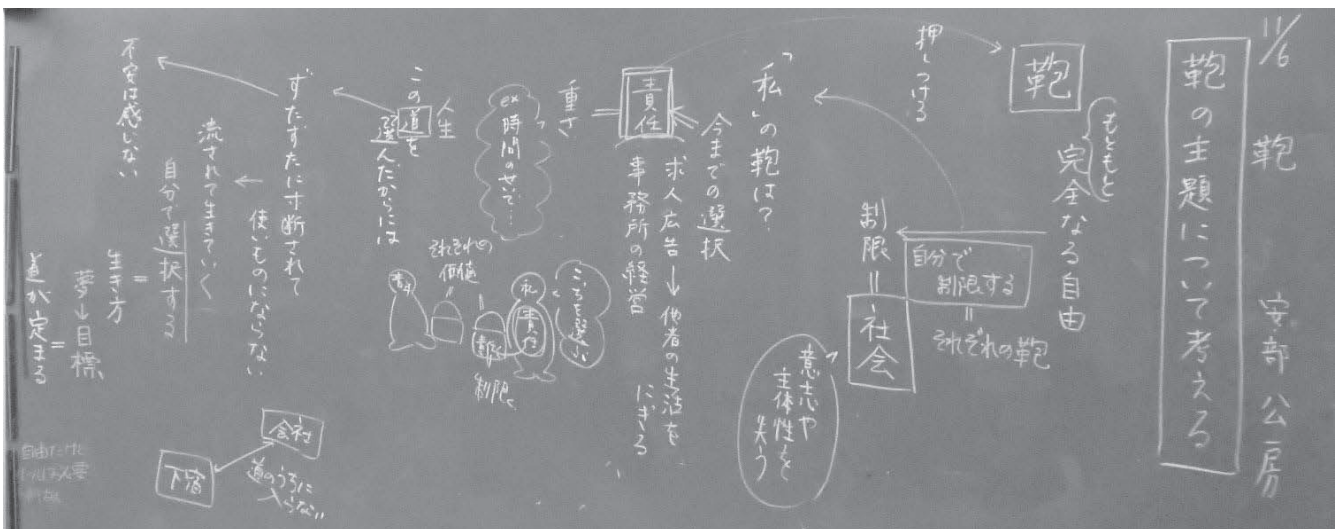
< 三つの作品を比較して考えた発言 >

- ・三崎重記の『私』では、「自分とは何か」を考えた。データがなければ「私であること」を証明できない社会において、「靴」で表されている「自由」はその人がどう生きるかを考えているのではないか。
- ・『バースデイ・ガール』の主人公が「何を望んだところで自分以外にはなれない」と言っているように、自分の人生をどのように生きるか、何を自由ととらえ、何を選擇するかは、その人に委ねられているということだろう。

など

このように、子どもたちは制限された自由と、無限に選択肢のある自由を比べたり、今まで読んだ作品を根拠にしたりしながら「靴」や「道」が象徴していることや、それに伴う自由と道の選択について考えを深めていった。

語り合いの過程で「靴はもともと完全なる自由で、何が制限されるかはその持ち手によるはず。だから誰にとっても同じものではなく、それぞれの靴が存在している」「自分の夢や目標が見えることで靴にはある程度の制限が生まれる。その制限があるから進む道を選択することができる」といった意見も出てきたことで、「人生と自由」を重ね合わせて作品を読み味わう姿が見られた。また、以前に読んだ二つの作品のキーワードと比較したり、それぞれの作品の叙述に立ち戻ったりしながら読みとりをしていくことで、主題にせまっていくことができた。



< 板書 5 語り合い③ 後半「靴の主題について考える」 >

(4) 人生を歩むうえで大事にしたいことについて 考えよう

ここまで作品の主題にせまる読みを構築してきた子どもたちは、自分の経験や思いを重ね合わせ、人生を歩むうえで大事なことについて考えを深めていった。そこで授業者は次の二つの質問について最終レポートにまとめるように提案した。

- ① 語り合いを通して「道を選択すること」や「自由」をどのようにとらえましたか。
- ② 三つの作品を通して、あなたはどのようなことを考えましたか。

- ・ 私たちは鞆に荷物を詰め込む。そして、鞆を運び、使い、そしてまた鞆に何かを詰め込む。この行為はすべて未来の自分のためのものだ。本来の自分を形成するもの、つまり、決意とも考えられる。その詰め込んだ決意とは裏腹に、行きたい方向（つまり人生）を制限するものである。それを僕は自分（世界中の人それぞれ）の決意（人生）を妨害する障害、いわば世間の常識や反対などだと考えた。前に進みたいのに進めない矛盾は現代社会でも言えるだろう。自分の人生を自分で決められないことを批判、問題提起しているのだと思う。
- ・ 自由には三種類あると思う。そのうちの 하나가「鞆を持ち、行く道を制限されている中での自由」だ。私たちは学校生活において決められた規則の中で自由を見つけている。制限があるけれど私たちは自由と感じている。自由をどのようにとらえるかは難しいけれど、一部でも許されているものがあるならば、それは本物の自由として認めるべきだと思う。
- ・ 僕はこの道の選択を、日々の些細な選択と同じようなものではないかと思った。鞆を持って学校や会社に行くルーティンみたいなものだ。自分で選択する責任から逃れているとも考えられる。僕は与えられた自由を捨てることができるのが本来の自由であり、嫌になることのない自由ではないかと思う。作中の「私」は「これはこういうもの」という当たり前の考え方を捨てて、先入観をなくして物事を見ている。そして選択、決定していくことが人生だと感じた。

- ・ 三つの作品に共通しているのは、社会の現状を比喩的に伝えているということだ。社会の流れに流されている人がいる。技術発展により情報化が進むことで人間の存在が軽くなっているのではないか。自分の生き方よりも人の生き方が気になることが多いことへの批判。どちらも最終的に自分で問題を解決し、その人に合った生き方を選択している。
- ・ 『バースデイ・ガール』ではありのままのままでの大切さや、自分を認めることの必要性を感じた。たくさんの自由の中で選択していくことが人生。私はこれから自分の存在を見直し、自分に自信をもって、自分の意志で人生を歩いていきたい。確かに今の世界は忸度、プライドや立場など、気にしなければいけないことがたくさんある。そして個々が果たす役割も自分の意志とは違うことを求められることもある。そんな中でも自分を見失わず、自分がしたいことを忘れずにいることが本当の私なのではないか。

など

本題材を通して子どもたちは「本当の自由とは何か」ということを考えてきた。その中で、自分たちが世間の目や一般常識といった制限に知らず知らずのうちに影響されていることを改めてとらえ直す姿が見られた。そして、その制限が必ずしも自分を縛るのではなく、新たな道への一步になることについても考えが深まっていくようすが見られた。三つの作品で描かれる「私」の姿はそれぞれ異なっているが、共通する部分として「自分とは何か」という点があることも記述されていた。「私」という個性と時代の変化をとらえることにより、データによってコントロールされる社会の中で「私」という存在を証明することの意味や、「何を願っても自分以外にはなれない」という言葉の意味を改めて問い直し、三つの作品の主題について考えを深めていくことができた。

作品を読むことを通して様々な価値観にふれ、これからの自分の人生や生きることについて自分を見つめていく姿は、本題材における国語科の願う学びの姿であったと言えるだろう。

成果と課題

1 成果

今年度は題材の本質にせまる読みが構築できるように、主題や主張の同等関係や対比、因果関係などを意識して意図的な題材配列を行った。題材を読み進めていく中で、ものごとの価値や人々の生き方や考え方について思いを馳せ、考えを深めていくことができた。また、読みとったことをもとに、自分の考えを表現する場として、創作などの書く活動も取り入れた。互いの作品を読み合ったり、批評し合ったりすることで、他者に伝わる表現方法を模索することにもつながった。

(1) 複数のテキストを読み比べることによって作品の解釈が深まったこと

1年生では杉みき子『飛べかもめ』、別役実『空中ブランコ乗りのキキ』、吉橋通夫『ぬすびと面』と物語文を重ねて読んでいくことで、象徴的な表現や比喻、情景描写などのから読みとりを深めていくことができた。そして、「自分らしく生きること」や「信念を貫くこと」といった人物の生き方を味わい、自分の経験と結びつけながら読んでいくことができた。2年生では説明文『壁に残された伝言』を読む際に、映像資料とそこからつくられた新書版を比較した。一部が切り取られた教科書の文章を読むことにとどまらず、全文を読み、教科書では描かれていない部分にもふれることで、筆者の主張にせまることができた。また、映像資料を活用することで、メディアによる表現の違いに気づき、それを視聴する側の感じ方にも変化があることに気づくことができた。3年生では『ディズニーランドという聖地』を教科書と新書版で読み、すやまたけし『素顔同盟』の主題と比較した。子どもたちは「聖地と聖域」という切り口から「作られた自然」と「ありのままの自然」の意味を問いながら読んでいった。ディズニーランドにある「人工的な自然」が与える安心感と、『素顔同盟』に描かれた「仮面を外して生きる豊かな自然」について考えることで、人間らしく生きるとはどのようなことかを改めて考察していった。

このように、複数のテキストを比較して読むことを重ねて実施していくことで、多様な価値観に触れることができ、言葉を比較しながら自分の考えを構築していくことができた。作品の共通点や相違点をとらえながら自分なりの読みを構築していくことは、自分の生き方や考え方を深めることにつながっていくだろう。

(2) 読みとりから書くことへ場をつなげることによって、子どもたちの表現の幅が広がってきたこと

1年生では『空飛ぶ魔法のほうき』を読み、「読み手がイマジナリーな世界を広げられるような文章を書こう」というテーマを設定し、写真からイメージを膨らめた創作作文を行った。2年生では、休校中に読んだ本を紹介する活動を行ったことで、自分の考えをもっと的確に伝えられるようになりたい、という思いをもつ子どもが増えた。そこで、好きなことを伝えるための説明文を書くことに挑戦した。主張をわかりやすく伝える説明文を書くために、既習の説明文の書き方を活かし、一人一人が文章構成や資料の提示の仕方を工夫して書くことができた。3年生では島崎藤村『初恋』をモチーフにして、オリジナルの創作小説を書いた。小説を書く際には、既習の小説や物語で描かれていた印象的な描写の書き方を取り入れていく姿が見られた。このように、読みとった表現のおもしろさを活かす場を意図的に作ることで、子どもたちは自分の思いを表現する言葉を選び、読み手を意識した文章を書いていくことができた。また、印象的な言葉があると、自分も使ってみたいという意欲にもつながった。

豊かな情景描写や伏線の描き方など、魅力的な表現を活かして書くことによって、子どものそれまでの読みの視点が表出されたり、新たな表現方法を習得したりすることにもつながっていくのではないだろうか。

2 課題

意図的な題材配列をする際には、作品の本質にせまる問いの精選や、読み比べをしていくためのテキストの選択など、今後もさらなる検討が必要である。子どもたちが様々な視点に立ってものごとを考えたり、主張の違いをとらえて自分なりの考えを構築できたりするようなテキストの精選をしていきたい。今年度は1年間の学びを意識した実践だったため、3年間の学びを意識した立体的なカリキュラムを構成していくことも今後の課題である。また、問いの焦点化や意見対立が見込めるような資料を提示するタイミング、教師の発問のタイミングも子どもの学びを豊かにしていくために重要である。今後は、子どもの学びの足跡が残るようなレポートのあり方や、表現活動の場について検討し、子どもたちが「言葉を学ぶ」「言葉から学ぶ」ことを自覚的に行うことができるような実践を重ねていきたい。